

山と博物館

第29巻 第4号

1984年4月25日

大町山岳博物館



五月の塩の道祭り 千国街道を歩く人々（大町市社にて）

花の咲く頃

編集部から右の表題で小文をまとめろとのお達しがあり戸惑ったが、多分お花見時期に見られる大町近辺の蝶について散文調に書けとのことだろうと独断し、思いつくまゝ綴ってみた。早春の末だ残雪が点在する頃、陽だまりで翅を休めてはいるが近寄ると素速く逃げてしまう濃艶な色彩のクジヤクチョウや空色のベルトも鮮やかなルリタテハ等タテハチョウの仲間が昨秋からあの厳しかった冬を成虫の姿で越して来た強者共で、その生命力には只々敬服させられる。一方郊外の雑木林周辺を散策すれば足元から小さな褐色の翅をもった蛾に似たセリチヨウが気忙しく飛び立つだろう、これはミヤマセリでやはり早春いち早く姿を現わす蝶である。又同じ小型でも翅表が青藍色に輝き裏面は黒褐色のコツバメと呼ばれるシジミチヨウが灌木の小枝の周りで見られるが、これも春を告げる仲間である。最も我々に馴染み深いモンシロチョウも四月中旬には出現するが、昨年は大町市俵町で初めて見かけたのが四月十六日だった。近頃ではサクラ前線に倣ってモンシロ前線という用語が新聞紙上でも見かけるが今年は大雪でサクラ前線も大幅に遅れているとか、大町地方へモンシロ前線が北上して来るのは果して何時頃か興味深い。春の蝶の真打は何と言ってもギフチョウ風だろう、その美しさは比類ないものでちょうど桜の開花頃に現れ、落葉松林の一面に咲き乱れるカタクリの花を訪れている姿は確かに春の女神に相応しい。しかし美しさが禍してか、いやその双方の原因、即ち乱獲と環境破壊の狭み討ちに遭い大町地方のギフキョウは絶滅ノヒメギフキョウが僅かに命脈を保っているのみである。一方白馬山麓や小谷方面のギフキョウも激減しており、このまゝでは大町の二の舞を辿るのではと憂慮されている。テーマに逆らったおちあちあになって恐縮だが現実には直視して早急に対策を構いたいものである。

（山岳博物館協議会委員・福島融）

信越文化の交流

— 千国街道を仲立ちとして —

田中欣一

生きていた「四ヶ庄」

昭和56年の夏、屋根職のことを調べるために、越後の高田に出かけたことがあった。そこ（上越市稲荷）は飯森（白馬村）屋根職の集団居住地で何代かにわたって、越後と信州を往来していたところである。

探訪の主たる目的は、茅葺きが民家の主流を占めていた昭和30年頃までの、屋根職人とその棟梁であった草間家を訪ねて、当時の話を聞くことにある。稲荷部落は広い田園に囲れた木立ちの多い静かなところであった。目指す草間家は直ぐわかったが、着いた時刻が夕方ということもあって、私はまだあちこちに残っている茅葺きの民家を急いで撮って歩いた。白馬村や小谷村のそれと比較してみ

たいということからであった。

やがて停めておいた車が「松本」であることを知った通りがかりの老人から、

「信州からお出かね。」

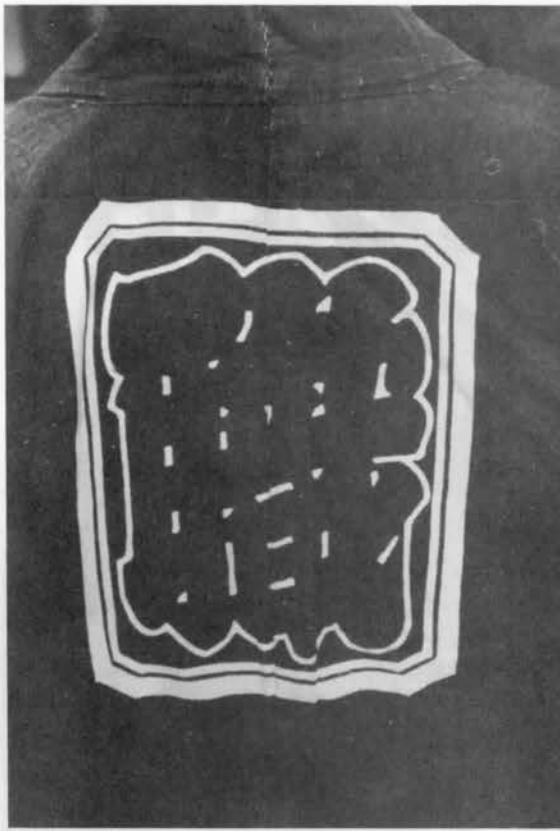
「はい、大町の近くから。」

「それじゃ四ヶ庄かな。」

「そうです。よくご存知で。」

「やあ、若い頃は毎年行ったものだ。」

今は白馬村においてさえ、死語になりかかっている「四ヶ庄」を、高田の地で聞くとは思ってもよらぬことであった。じいさんのこともなげに言った「四ヶ庄」ということばの響きの中には、長年使い馴れた語感となつかしさがこめられていた。昏れなずむ路地に涼みながらやってきた老人たちも、



高田屋根職の法被 (はっぴ)

「ほう、四ヶ庄からのう。」と口々に、若き日々には想いを馳せて語り合うのだった。この人たちにとつて、雪が消えて春がやってくると、「さて、また四ヶ庄だのう。」は合言葉であったというのだった。

以下信越交流のあとを、三、四の例をあげてたずねてみたい。

茅葺屋根

目指す草間家はすぐわかった。思わぬ珍客というより旧知の人を迎えるように、私は奥の間へ招き入れられて早速お茶をいただいた。部屋には額に入れた昔風の大きな写真が、いくつも飾られてあった。私ほどか見覚えのあるような気がして、見てまわって驚いた。それらはいずれも四ヶ庄平（現白馬村）を主とした茅葺の竣工記念の写真であった。飯森長谷寺山門・嶺方諏訪社本殿というように、写真は、単に建物を写したというだけでなく、当時の風俗を写して余りあるものであった。

現当主とその母は、先代までが幾世代かにわたって世話になった四ヶ庄へ、是非一度は訪ねて見たいということであった。そして、棟梁草間久五郎が使った法被や大鉢・中鉢・つまみ鉢・金針・竹針・楯など、屋根職としての諸道具を見せてくれた。摩滅やまだ失なわれていない光沢の中に、職人の息遣いがあった。

草間家の近くに住む、かつての屋根職であった老人たちを交えて、話ははずんだ。それによると、同じ高田在の棟梁横田氏の仲間には、春夏の時期には松本の島立地区を、秋には小曾部（元東筑摩郡洗馬村）地区を、いわば縄張りとしていたこと、草間氏死後の飯森屋根屋は江平氏が継承したこと、などのように安曇・塩筑は無論、北信一帯はほとんど越後職人を棟梁として、地元の屋根職たちがつながらりを持って、それぞれの地区に入りこんでいたことが分った。

棟梁は春の屋根仕事に先立って、正月には得意先めぐりをしたのだというし、その時の

土産は高田の翁餅を常としたという。また、安曇への出嫁ぎは四月から八月までで、秋から暮にかけては松本東筑方面が主であったという。篠の井線ができてからは、麻績駅下車して大町・小谷四ヶ庄方面へ往復したのだというし、四ヶ庄からの帰りの土産は麻と真綿だったという話も、なるほどと思わせられたのだった。上越市黒田の石野氏は草間久五郎の弟子であったが、その言によると、草間氏のグループは十人、春は四ヶ庄、夏は更埴南宮、秋は山形村竹田を得意先とし、葺き草は四ヶ庄は茅、南宮は麦、竹田は麦と茅であったといい、このことも土地の事情をよく示していることがわかる。

総称「高田屋根屋」は今日なお、老人たちから聞くことができるし、小谷四ヶ庄から安曇地区にわずかに残る茅葺屋根職人の大部分は、若い時代に越後職人についてその業を学んだ人々である。

大工

白馬村飯森の長谷寺は曹洞宗の大寺であるが、その重厚な山門は禅宗の建築様式をよく伝え、造立以来百六十余年を経た今日なお微動だにしない。その棟札を見よう。

「十方檀那為菩提 文政三庚辰年 九月十四日 大工棟梁 越後国蒲原郡三条住人

齋卷 和吉

越後国住人 栄 七

信州安曇郡大町住人 八五良

同大町組野平住人 栄 藏

同大町組飯森住人 岩 七

越後国住人 徳 藏

大町組細野住人 長 松

越後国住人 鐵治良

同住人 徳 七

大町組住人 政右衛門

棟梁 信州安曇郡大町組飯森村住人

同組入野林住人 佐五右衛門

同 清兵衛

越後国糸魚川町

四十物高申

(以下略)この棟札によって、名建築の誉高い長谷寺山門の造営に越後の大工が大きく関わったことが、歴然としている。未調査のためには確かには言えないが、安曇地区の寺院でその建築が、越後職人の手によったものであるという伝承のあることを、私はいくつか聞いている。

石工

高遠石工の名で知られる現伊那高遠町とその周辺の石工たちの活躍舞台が、信州一帯を遙かに越えて、遠く関東・中京・関西の地にまで及んでいることは、すでにいくつかの著作によって紹介されている。

大町以北のものを少し拾ってみよう。

○大町市大黒町追分 大黒像

嘉永五_{壬午}年三月廿一日

石工 當国高遠非持住 伊藤徳十

同 留十

○大町市青木湖畔 佐野坂西国三十三番観音

文政十二_{丑年}

高遠 片倉村石工 伊藤堅吉
○白馬村佐野 二僧塚由来碑
寛政八_{丙辰}年夏五月

石工 伊奈郡高遠河下青嶋村 北原

喜代八

○白馬村白馬町平川八幡社 日清戦争凱旋記念碑
明治二十九_年二月

上伊那郡美篋村 石工 伊藤逸平

○小谷村親ノ原 前山観音弘法大師像
安政五_{戊午}年七月供養日

高遠 伊藤桑左工門 原方蔵

などであるが、高遠石工の足跡はさらに北上して信越国境の大綱峠を越えて、糸魚川市に及んでいる。

○糸魚川市一の宮天津神社 石舞台
安永_{乙未}四年九月出来

信州伊奈郡福島在住

山岸伴左工門

○糸魚川市早川日光寺 宝篋印塔
宝曆七_{丁丑}年七月吉日

信島高遠四日市場 石工 五右衛門

松本深志神社に寄進された玉垣(拓本)

がそれで、宝暦七年は今を去る二百二十七年前のことである。高遠から千国街道を経て、越後へ脚を運んだ石工たちの歴史は、いつころまで遡ることができるのであろうか。糸魚川市及びその周辺には、調査が進めばさらに高遠石工の系譜と足跡を知ることができよう。墓石に至っては相当な数にのぼるものと推定される。

これら石仏や碑のほか、信越両国の交流を物語るものとして、千国街道のそれぞれの起点と終点である松本と糸魚川に記念すべき石造物がある。松本のそれは深志神社の社殿をとりまく石の玉垣に、「越後国糸魚川町 四十物高申」の名を三基見出すことであり、糸魚川のそれは一の宮の天津神社境内にある立派な常夜燈二基に刻まれた、「信濃松本魚問屋 滝沢仙七 横山長吉 滝沢憲治 吉沢喜七 吉沢保一郎 鷲沢勝吉 横山政太郎 明治三十三年庚子四月 世話人四十物年行司」である。

共に両国からそれぞれの神社に寄進されたものである。小谷村池原の諏訪神社にある、「糸魚川横町住北邑惣治郎」が「文政十一年八月吉日」に奉納された、帆船永順丸を描く絵馬二面も、その好例であろうし、千国街道筋の各地に残る道標も忘れることができない。例えば信越国境の山上池である角間池下にある道標「右 松本街道 大綱 左 中谷道横川 奉納為往還安全 文久元_{辛酉}八月吉祥昌禪寺羅漢法光大和尚禪師 世話人 武田俊徳齋 松山良輔」、白馬村飯森にある「右 糸ちご 左やま道」、小谷村深原銭神平の「右ハ越後道 左ハ深原道 天明三癸

卯年」などがそれである。

このように信越交流の糸を手繰れば、さまざまな形で現存するものだけでなく、他方面にわたって実に興味深い。旧家に所蔵されている古文書にいたっては、数え切れないほどの点数であろうし、伝承や形無きものにも大いに注目しなくてはならない。

畷女を主とする旅芸人や毒消し売りや富山の薬売り、小谷温泉への湯治、善光寺・戸隠神社・雲台寺への参詣、越中早乙女たちの善光寺平への田植えなどなど、いずれもこの街道を歩くことよってのみ、果たされたこと



松本の魚問屋から糸魚川天津神社に寄進された常夜燈



松本市養老坂を往く糸魚川市「塩の道歩こう会」の人たち

であった。千国街道が越後からの塩や海産物、信州からの麻や綿を主とした数種種類にもよる、生活物資運搬の典型的な経済路線であったことは、勿論否めないことであるが、駄賃稼ぎの牛馬や歩荷だけが往来した道では、決してなかったのである。当然のことながら、言葉も技術も信仰も、そして、民俗行事も荷物と共にの重畳たる山なみを越えて往来したのであった。その一例として、道祖神の信仰立は信州から越後へ、念仏信仰は越後から信州への流れがあったことを知るのである。

式と力を持ち、個性ある文化を育てて伝播した。人の世の底辺に住んで喘ぎ苦しんだ盲目の女までが、芸を身につけて激流に架かる一本橋をも渡りながら、庶民の世界に人生の無常を唄ったのであった。

信越交流の歩みは、諏訪信仰やヒスイや黒曜石の時代にまで、想いを巡らせるものである。そして、総じて二つの国の関係は、互いに昔に遡るほど遠くで近い存在であり、明治中期から現代へ下るほど近くで遠い存在であったと言える。

近時、歩くという人間本来の営みへの回帰

こうして、信越交流の歴史は探れば探るほど、深さと広がりをもって古代史にまで遡ることができ。小谷村深原から地蔵峠を経て、三坂峠(大峠)に立つと日本海の水平線が、せり上って見える。糸魚川の街は指呼の間にあつて沖を行く船が数えられ、岸打つ潮騒の音を聴く思いである。振りかえると信州路の山並みは、幾重にもなつて次第に影を淡くして、莫々たる歴史空間の中に消えていく。

峠の石に腰をおろして頼りに胸に去来するのは、国を異にし、ままたぬ交通条件下にあつた昔は人馬物資の往来が繁く、今日斯様な目的を持ち、生きることの資を得るために、この道を歩くことはなくなつたということへの思いである。今日、自動車を駆つて魚を食べに行つたり、夏、海水浴に向かう車の列は、国道百四十八号線を埋めつくして時ならぬ騒動をおこすことがあるが、それでもなお越後は遠い。明治初期における越後の人口は、江戸を越えて日本最大であった。雪の中から生れた、強靱なバイタリテイは、確固たる様



が叫ばれ、そうした立場で塩の道が脚光を浴びつつあるが、街道や峠の時代が終焉した今日、道はまた新しい装いでよみがえりつつあるのだ。人は自らへの問いとして旅を求め、

峠に立つて来し方行末に小手をかざし、やおら腰を下ろして、しばしの時を黙って送りたのである。

(五十九・四・十「白馬小谷研究」主宰)

博物館だより

資料寄贈ありがとうございます

- キノコ 1点 大町市大黒町 太田勇
- 黒曜石 1点 諏訪市下諏訪
- フョーライト株式会社
- 南安曇郡三郷村 木船清
- 大町市三日町 飯島佳子
- 大町市大黒町 平林照雄
- 大町市三日町 田中俊宏
- 大町市俵町 長沢修介
- 南安曇郡穂高町 浅川とみ子
- 東京都世田谷区砧 吉澤健
- 大町市宮田町 西田均
- 伊藤静男
- 大町市平中綱 西沢吉高
- 大町市高根町 栗林千春
- 大町市社宮本 仁科神明宮

- 春嶽 6点 大町市社宮本 松井勤治
 - ウス他 3点 大町市下仲町 武田幸坪
 - 稲刈鎌他 3点 南安曇郡穂高町有明 青木治
 - 正条ワク他 8点 大町市大黒町 宮沢久子
 - スルス他 3点 大町市神楽町 松沢久紀
 - 馬のクツゴ 3点 大町市高見町 松田禎三
 - ヨッコギ 2点 大町市大黒町 千葉保人
 - フイゴ 1点 大町市 昭和電工長畑発電所
 - 薪瓦斯発生炉装置 1点 大町市六日町 平林茂雄
 - 絵はがき 6点 大町市神楽町 山本携挙
- 山と博物館 第29巻 第4号
- 一九八四年四月二十五日発行
- 発行所 長野県大町市 TEL 220-2111
- 印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
- 大町市社宮本 大町市 大町市 大町市
- 大町市タイムス印刷部
- 定価 年額1,200円(送料共) 切手不可
- 郵便振替口座番号 長野県 大町市 123-193

白馬村飯森にある道標「右あちこ 左やま道」